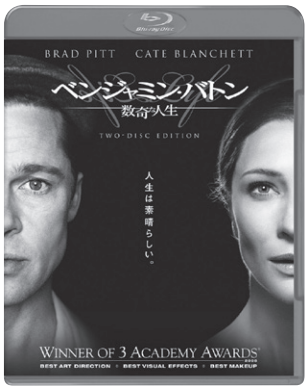
心に残る映画

『ベンジャミン・バトン　数奇な人生』

2008年／アメリカ／デビッド・フィンチャー監督作品

温かくて切なくて
孤独の中で輝いて見える人生

会員　永石 一恵（63期）



『ベンジャミン・バトン
数奇な人生』
ブルーレイ ¥2,500（税込）
DVD　¥1,500（税込）
ワーナー・ホーム・ビデオ

この映画の原作は，F・スコット・フィッツジェラルドの，わずか50頁ほどの短編小説であるが，スピルバーグがデビュー作として映画化を試みたことがあるなど，多くの人を魅了する奇想天外なストーリーである。

主人公のベンジャミン・バトン（ブラッド・ピット）は，第一次世界大戦が終わった日に生まれた。しかし，息子の誕生に喜び勇んで病院に駆け込んだ父親が見たものは，この世のものとは思われない赤ん坊だった。それは，白内障で目が見えず，耳も聞こえず，手足は関節症だらけで皮膚もしわくちゃの，余命幾ばくもない老人同然の赤ん坊だったのである。恐怖に襲われた父親はすぐさま赤ん坊を抱えて街へ飛び出し，老人ホームの前に置き去りにした。しかし，捨てる神あれば拾う神あり，その老人ホームに住み込みで働く女性は，赤ん坊にベンジャミンと名づけ，自分の子供として愛情を注いで育てていく。

ベンジャミンは，年月とともに驚くべき変化を見せる。曲がった腰はまっすぐになり，車いす生活だったのが自由に歩けるようになり，髪は増え，肌もつやを増していく。普通の人が経験する成長，そして老いとは逆に，ベンジャミンは若返っていくのである。

見た目は老人のベンジャミンは，少女デイジー（ケイト・ブランシェット）と出会い，恋をする。デイジーもベンジャミンを理解し，特別な感情を抱く。しかし，ベンジャミンは若返って身体が丈夫になったことから自由に外の世界に出ていき，二人は互いを想い合いながらもすれ違う。そして，二人の肉体年齢が重なるころ，ようやく共に過ごせるようになるのだが，それも長くは続かなかった。二人の間に子供が生まれると，ベンジャミンはデイジーの元を去ってゆく。彼は，自分が若返っていくことで，父親としての役目を果たせず，デイジーに自分の面倒まで見させるのが辛かったのである。デイジーも，別れたくないのに彼を引きとめることはできなかった…。

親しい人と年々衰えていく肉体を慰め合うことで老いに対する焦燥感を紛らわせることもできるし，一緒に歳を重ねていくことでその時々で共感し合えることがたくさんある。そのような共感ができないベンジャミンの孤独さは，この映画の全編を通じてひしひしと伝わってくる。しかし，そうした孤独の中でもベンジャミンの人生が輝いて見えるのは，時間の流れとは関係のない特別な瞬間，すなわち，出会いと別れ，友情，家族愛，恋愛等があるからで，この映画を観ると，そのような特別なものを再認識することができるのである。

美しい主役二人（特にそれぞれの若い頃にはうっとり！）や，映画の中に散りばめられたくすっと笑えるエピソードなどもこの映画の見どころである。大きな盛り上がりはないものの，温かくて切なくて最後まで観る人を惹きつける作品なので，週末に何を観ようか迷っている方にはおススメしたいです。